

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19610013
 研究課題名（和文） グローバル化時代の南インドにおける〈文明の衝突〉と社会秩序の再編成
 研究課題名（英文） “The Clash of Civilizations” and Reorganization of Social Order in the Age of Globalization in Southern India.
 研究代表者
 杉本 良男（SUGIMOTO YOSHIO）
 国立民族学博物館・民族社会研究部・教授
 研究者番号：60148294

研究成果の概要（和文）：現代南インドでは 1990 年代以降宗教間対立が激化し、いわゆる「文明の衝突」状況が深刻化している。災害復興や寺院祭祀などについての調査研究から、その一因を西欧的な「宗教」なかでも「ヒンドゥー教」概念が定義されることにより、宗教、信者などの実体化が起こり対立をあおってきた過程が明らかになった。その一方で、こうした災害復興や寺院祭祀において、従来の宗教間対立、カースト間対立を超え出る動きが見えてきており、その動向が注目される。

研究成果の概要（英文）：In Southern India, since 1990 rivalry between religions, which can be considered a “Clash of Civilizations”, has reached new depths and become more violent. Studies and research regarding disaster recovery and temple worship are shedding light on the process and reality of the incitement of rivalry, which are influenced by western definitions and understandings of ‘religion’, particularly ‘Hinduism’. On the other hand, in the context of recovery from disasters or temple worship, a movement beyond hitherto noted rivalries between religions and castes is also drawing attention.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会人類学・南アジア研究

科研費の分科・細目：社会秩序学

キーワード：(1)インド、(2)タミルナードゥ州、(3)ケーララ州、(4)ヒンドゥー・ナショナルリズム、(5)災害、(6)インド洋津波、(7)ヒンドゥー寺院、(8) 自助グループ

1. 研究開始当初の背景

現在世界において、アメリカ主導のグローバル化が進むなかで、文明・宗教間の対立が各地域のミクロな社会秩序まで支配しようとしているのが現状である。ハンチントンの「文明の衝突」論は厳しい批判をうけながらも、結果的にはとくに 9.11 以後の世界情勢を言い当てていた面がある。その政治的、国策的な意図は別にして、21 世紀の世界秩序を語る上で批判的に検討しなければならない課題を与えている点では評価しなければならない。ただし、ハンチントンの議論には歴史性がまったく欠如しており、この点で強く批判されなければならない。本研究が対象とするインドにおいては、1947 年の印パ分離独立以後、とくにヒन्दゥー、ムスリムの対立が続いてきたが、1990 年代に入って急速な経済成長が始まるとともに、いわゆるヒन्दゥー・ナショナリズムが勢いを増し、ムスリムだけでなくクリスチャン、仏教徒などへの攻撃がはげしさを増すようになった。このような時代に、こうした宗教間対立あるいは文明の衝突状況につき、社会秩序の再編成という視点から検討することが焦眉の課題であった。

2. 研究の目的

本研究は、南インドのミクロな実証的事例研究から出発して、文明・宗教間の対立図式について、とくにハンチントンによる「文明の衝突」論の現実的意義について批判的に再検討し、グローバル化のなかでの当該地域における社会秩序の新たな可能性を追求しようとするものである。

本研究においては、まず、現地調査と文献研究によって、南インド・タミルナドゥ州およびケーララ州の歴史的社会的な文脈で、ヒन्दゥー・ナショナリズムの現状と歴史的背景が全体的・総合的に検討される。そのさいつぎのような仮説を実証的に検証することが目的となる。つまり、「キリスト教の自己像の世界全域へと浸透し、またそれへの抵抗や軋轢のありかたが、非キリスト教世界の近代における社会秩序の再編成を特徴づけることになり、遠く現在のヒन्दゥー・ナショナリズムに代表される宗教的ナショナリズムがもたらすさまざまな紛争にも結びつき、「文明の衝突」論に一定の説得力を与えることになった」。そして、さきに述べた問題意識から、本研究の最大の課題は、西欧中心主義的で覇権的な「宗教」概念の問題を十分に意識しながら、「宗教」概念がそれぞれの地域に固有な文脈のもとで読み替えられている点に注目し、そうしたことの行われて

いる局所性の次元に徹底して視点を置くことで、宗教的ナショナリズムや宗教対立へと結びつくだけではない近代における「宗教」の多様な展開の可能性を探ることである。

本研究は、巷間流布されているインド全体における「宗教対立」や、反対に南インド、特にケーララで喧伝される「コミユナル・ハーモニー」なる言説を批判的に検証し、徹底して個人々の信仰と生活の場に立ち合い、その歴史的社会的な背景を広く考慮することによって、「宗教」とそれに関わる社会秩序の実像が浮き彫りにされる。つまり、多宗教の融和的な共生状況がどのように現実化しており、またそこからヒन्दゥー・ナショナリズム（コミユナリズム）が如何に遊離してイデオロギー化してくるのかのプロセスを明らかにすることができる。予想されるポイントは、所謂ヒन्दゥー教徒の暮らす地域社会がキリスト教や教会組織の影響を受けつつ一定の再編成を受けていることで、一定の多宗教共存の基盤が築かれているという局面と、そうした地域社会の新しい秩序の形成に失敗した場所、あるいは地域社会から離れざるを得なかった人々の受け皿としてのヒन्दゥー・ナショナリズムが機能する局面、ということになる。こうして、南インドにおいてコミユナリズムが抑制されている条件とそれを誘発する条件をともに析出することによって、インドがヒन्दゥー・ナショナリズム一色に塗りつぶされ、「文明の衝突」論に絡め取られようとしている現実に対して有効なオルタナティブを提供することができると考えている。

3. 研究の方法

上記の仮説を検証するために、1) 宗教ナショナリズム、ヒन्दゥー・ナショナリズム、インドのコミユナリズム(宗教ナショナリズム)などに関連する文献資料の収集と分析・考察、2) 南インドのキリスト教の活動についての歴史資料の収集、分析・考察、3) 現地調査の実施と実証的な資料の収集による実態の把握、を通じて、全体関連的に文化(社会)人類学的研究を行う。

対象地域として、インドにおいてキリスト教の影響を強くうけ、またヒन्दゥー、ムスリムをふくめた錯綜した宗教状況をもつ南インドの二つの州タミルナドゥとケーララを措定し、とくにカーストの枠組みはもちろんのこと、性、世代、教育、政党支持などの諸次元をも加えた地平で、各地域社会の多元的現実へと踏み込んだ形で、「ヒन्दゥー

教」ならびに「ヒンドゥー・ナショナリズム」の現象の仕方を全体的、総合的に考察する。とくに、ヒンドゥー・ナショナリズムの第一のカウンターパートされてきたイスラーム教だけでなく、むしろキリスト教の活動を大きくクローズアップすることが理論的に必要である。つまり、ヒンドゥーに関わる言説、組織、活動はその多くを地元におけるキリスト教ミッションから直接的に学んできたものであり、その影響からくる現象は実に多様で多義的なものであると考えられるからである。これによって、センサスにおいて「ヒンドゥー教徒」と分類されている人々にとっての「宗教」やそれに関わる社会秩序の捉え方がけして均質なものでない生きた現実が明らかになるはずである。

具体的なフィールドとしては、ヒンドゥー・クリスチャン間の融和と対立が交差するタミルナドゥ州の津波災害後の被災地、ならびにクリスチャンが有力な地位を占めるなか、カーストとヒンドゥーとマラヤーリーという三つのアイデンティティの間を人々が揺れ動く場としてのケーララ州各地の女神寺院で実施した。いずれもインドにおける多元的な現実をよく映す恰好の舞台である。

4. 研究成果

本研究は歴史資料や二次資料などによる「文献研究」と、南インド、タミルナドゥ州とケーララ州における「現地調査」を車の両輪として進められた。そして、当初の仮説「キリスト教の自己像の世界全域へと浸透し、またそれへの抵抗や軋轢のありかたが、非キリスト教世界の近代における社会秩序の再編成を特徴づけることになり、遠く現在のヒンドゥー・ナショナリズムに代表される宗教的ナショナリズムがもたらすさまざまな紛争にも結びつき、「文明の衝突」論に一定の説得力を与えることになった」を実証的に検討した結果次のような成果を得た。

「宗教」の概念につき、ギリシア時代に起こった人間界と超越界とのきずな、として定着した“religio”概念のラクタンティウスの転回によって、宗教はキリスト教を唯一の存在として、これに帰依しないものは異教的(pagan-paganus, heathen)、迷信的な集団としてくりだされることになる。宗教は古代的な儀礼の世界から一神論的信仰 theistic beliefの世界へと大きく転回した。しかし、キリスト教世界の分裂や宗教改革を契機にして、キリスト教を唯一のまことの宗教・信仰であるとする一元論が相対化され、複数の

宗教(the religions)というとらえ方が、しだいにあらわれてくる。

こうして、英語圏では19世紀に入って、キリスト教をそのうちの一つとして含む「宗教」の概念が定着する。キリスト教世界と関係の深いイスラーム教は、すでに16世紀末から“Mahumetisme”(1597)、“Mahumetanism”(1612)、“Muhammedrie”(1613)、“Islamism”(1747)、“Musulmanisme”(1818)などの用語でよばれていたが(Smith 1991: 60)、1801年に仏教(Boudhism)、1816年にヒンドゥー教(Hindooism)、さらに道教(Taouism, 1839年)、ゾロアスター教(Zoroasterianism, 1854年)、儒教(Confucuanism, 1862年)などの概念が現れた。こうして、複数の宗教が認知され、また「比較宗教学」という分野も成立する。

このように、キリスト教世界において「宗教」概念自体が大きく変貌を遂げ、またそれに伴って、異教世界がさまざまに認識されてきた。それとともに重要なのは、特にプロテスタント的用法にひかれつつ、インドを始め世界各地の「宗教」的な信仰もまた「宗教」として自己定義を始めていった点である。

例えば「ヒンドゥー教(Hinduism)」が初めて現代宗教的な意味合いで定義されたのは1816年のラームモハン・ローイによってのことだとされる。ローイは周知のように、イギリス植民地支配の影響の濃いベンガルにあらわれた宗教・社会改革者であり、ブラフマ・サマージ(Brahma Samaj, 1828年)の創始者として知られており、またインド・ナショナリストのはしりとして余りにも有名である。そしてまた、インドのエリート主義的ナショナリストの常として、英語教育を通じて、西欧的フィルターを通してインドの伝統に回帰し、ナショナリズムの核としていった経緯がある。こうして、ローイは、特に西欧世界から文字通り「ヒンドゥー教の父」とされる。

こうしてキリスト教モデルにより実体化された「ヒンドゥー教」は、植民地支配下のインドで容易に政治と結びつき、いわゆるヒンドゥー・ナショナリストを生み出した。その結果、独立後は主にイスラーム教徒を攻撃の対象にしていたのに対して、1990年代に入ると全方位的に、キリスト教と、仏教徒などへの攻撃が行われるようになった。実体化された宗教は相互の異化排除作用により、命を懸けた文字通りの「神々の闘争」を現出させたのである。こうした宗教間対立は、2004年インド洋津波災害後の南インド各地で顕在化するようになった。

例えば、ウェーラーンガンニの場合には、

キリスト教徒は大聖堂のご利益で奇蹟が起こったとこれを賞賛しているが、一方、反キリスト教勢力とくにヒンドゥー・ナショナリストは、周辺の被害をあげつらって、聖母マリアも津波は防げなかったではないか、と非難している。それだけでなく、津波被害からの復興に際しては、キリスト教関係のNGOなどがいち早く動き出し、それがかえって、支援と見せかけてキリスト教への改宗を迫っている、との根拠のない噂も流れて、いやがうえにも危機感がおおられるようなこともあった。それがときには神父や修道女などへの暴力沙汰におよんだ例さえある。そのため、修道女はふだん無地のサリーなどを着るのに対して、救援活動のさいには一般の女性が着るようなカラフルなサリーを着けて身分を隠すようにしていたという。こうしたキリスト教徒の折伏への脅威は、特にヒンドゥー教徒のあいだに根強く、ヒンドゥー・ナショナリストが危機感をあおったことも加わって、かえって暴力ざたにまで発展することがあったのである。

われわれにとって問題なのは、このような嘶が、その真贋や「科学的」根拠の問題をさておいて、宗教間対立の具としてつかわれていることである。特に、このような場面でのキリスト教の教会やNGO、福祉慈善団体などの活動は、人びとに改宗をせまる行為を伴っているとられて敵意をあおる結果になる場合が多い。その反面、キリスト教徒の側には、世界的に張りめぐらされた圧倒的に強力な情報ネットワークがある。インドでの政府の対応は、比較的早いほうであったが、キリスト教関係者の動きはより早く、また組織的であった。また、先の神話などもさまざまなメディアを通して流布しており、インターネット時代になってそれはますます加速している。もともと宗教というのは有力な情報メディアである。それが現代になって従来にもまして重要な意義をもつようになっている。

一方、ケーララ州におけるヒンドゥー・ナショナリズム勢力の脆弱性はひとつには地域の寺院にほとんど影響力を持ち得ないということになる。寺院は、もともと大地主層のナンブーディリ・ブラーフマンか貴族的なナーヤルなど高カーストの一族（タラワード）がそれぞれの領地に義務としてあるいは権利として保有していたのである。20世紀初頭から、あるいは本格的には20世紀中盤から、各カーストのケーララ州全域を組織する利益団体の地域支部がそれぞれ寺院を所有するようになった。この過程において全ての

カーストがほぼ均質な儀礼的な内容（ブラーフマン的な寺院儀礼）を共有するようになった。さらに1980年代末から特に都市部においてはカーストの別にこだわらない寺院の保有、運営が見られるようになってきた。20世紀のこうした動向は徐々に「ヒンドゥー」という範疇を実体化させてきたことは間違いない。ただし、その動向はまだ萌芽的な現象であり、相変わらず寺院を中心とした地域社会において、ヒンドゥー・ナショナリズム勢力は地盤を持っていないままである。まだ仮説の段階ではあるが、そうした状況のなかで、アイヤッパ・セーフ・サンガム（正式名称はAkhila Bharatha Ayyappa Seva Sangham）は、限界をもちながらも、ケーララ州内の地域社会における可能なヒンドゥー・ナショナリズムの土着化的な受容であった。

しかし、こうした紛争対立を強化する動きとともに、従来のカースト間、宗教間、集団間の対立を緩和する方向性も見られる。それは一方で、ケーララの事例においても、またタミルナードゥ州マドラス市北部の津波被災地域においても、従来の社会的対立要因を超えて、人びとの結びつきを強化し、あらたな社会編成の動向がみられる。その背景には、北インドとは異なって、南インドに固有の「寺院のない村には住むな」という強烈な宗教意識がある。

また、災害復興過程で特に奨励された自発的な「自助グループ」（Self-Help Group）の存在も同様の意味で注目される。これは都市、農村を問わず女性を中心にした自発的な参加、活動にもとづく集団化の動きであり、州政府などもこれを大いに奨励している。従来社会的には消極的な性格が強かったインド女性が、自助グループの活動を通じて、バングラデシュのグラミン銀行などをモデルにしたマイクロ・クレジットなどのマイクロファイナンスにも積極的に参加している現状がある。そこでは新たな社会意識を生み出す可能性がある。こうして、ミクロな視点からの現地調査によって、グローバル化社会の最先端にあるマイクロファイナンスの実態に到達する結果となった。

また、ヒンドゥー寺院は村落社会の人間関係を、町、都市さらにはインド外にまでのびるネットワークに位置づけるものでもある。こうしたネットワークは、当然商業ネットワークとして機能し、村落社会での生産物をグローバルに流通させる媒体となっている。一見古い宗教、寺院が先端的な経済あるいは政治の領域へと浸透し、新しい局面を開いている。そこではかつてマックス・ウェーバーが

近代化の阻害要因と評価したヒンドゥー教、カースト制がグローバル化時代の後期資本主義社会においてはむしろ促進要因として評価されるべき可能性があることを示唆している。

こうして、近代化過程における「宗教」の概念化・実体化の進行とその影響について歴史的に検討するとともに、現代的な状況において、ヒンドゥー寺院と自助グループの存在に、社会秩序再編成の可能性を指摘して、本研究の結論としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 18 件)

- ① 杉本良男 「比較による真理の追求ーマックス・ミュラーとマダム・ブラヴァツキー」出口顯・三尾稔 (編) 『人類学的比較再考』(国立民族学博物館調査報告 90), 査読有, pp. 173-226, 2010 年。
- ② サガヤラージ・A 「南インドにおける貧困・不平等ーヴァディパティ村の事例 (人類学的視点から)」『アジアにおける農村社会の変容〜環境・格差・貧困〜』(東洋大学アジア文化研究所研究年報第 44 号), 東洋大学アジア文化研究所, 査読無, pp. 45-53, 2010 年。
- ③ サガヤラージ・A 「インドにおける民主主義と発展ータミルナードゥ州のセルフ・ヘルプグループを中心にー」『アジア社会の発展と文化変容』東洋大学アジア文化研究所アジア地域研究センター, 査読無, pp. 183-215, 2010 年。
- ④ 小林勝 「歴史のなかのヒンドゥー教とその課題 (2)」『純心人文研究』, 査読無, 第 16 号, 2010 年, pp. 41-60。
- ⑤ 杉本良男 「人類学とキリスト教」『民博通信』, 査読有, 127 号, 2009 年, pp. 2-3。
- ⑥ Antonysamy Sagayaraj Image Building and Political Communication : A Case Study of Vijayakant, The Black MGR, 『アカデミア』人文・社会科学編 (南山大学), 査読無, 88 号, 2009 年, pp. 75-92。
- ⑦ 小林勝 「リーディングガイド (特集: 人類学とキリスト教)」『民博通信』, 査読有, No. 127, 2009 年, pp. 16-17。
- ⑧ 小林勝 「歴史のなかのヒンドゥー教とその課題 (1)」『純心人文研究』, 査読無, 第 15 号, 2009 年, pp. 81-98。
- ⑨ 杉本良男 「一枚のカレンダーが物語ることーインド」『アジア遊学』, 査読無, 106 号, 2008 年, pp. 94-103。
- ⑩ 杉本良男 「アーディ・ドラヴィダー実体化された不可触民カースト」(金基淑編) 『講座世界の先住民族ーファースト・ピープルズの現在 03 南アジア』, 査読無, pp. 143-155, 明石書店, 2008 年。
- ⑪ 杉本良男 「トダー外部からの視線」(金基淑編) 『講座世界の先住民族ーファースト・ピープルズの現在 03 南アジア』, 査読無, pp. 156-168, 明石書店, 2008 年。
- ⑫ Yoshio Sugimoto “Boys Be Ambitious”: Popular Theatre, Popular Cinema and Tamil Nationalism’, in Terada, Yoshitaka (ed.) *Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan* (Senri Ethnological Studies 71), National Museum of Ethnology, 査読有, pp. 229-240, 2008。
- ⑬ Yoshio Sugimoto “Ethnic Fashion in India”, *Minpaku Anthropology Newsletter*, 26 号, 査読無, pp. 5-7, 2008。
- ⑭ Antonysamy Sagayaraj Social Aspects of Communication, 『アカデミア』人文・社会科学編 (南山大学), 査読無, 86 号, 2008, pp. 31-52。
- ⑮ 杉本良男 「天竺聖トマス霊験記」『国立民族学博物館研究報告』査読有, 31 卷 3 号, 2007, pp. 305-417。
- ⑯ 杉本良男 「奇蹟とナショナリズムー南インドにおけるインド洋津波災害の事例から」(2006 年度学術大会テーマセッション記録) 『宗教と社会』, 査読有, 13 号, 2007, pp. 286-290。
- ⑰ Antonysamy Sagayaraj Collective Violence and Reconciliation:

A South Asian Narrative, 『アカデミア』
人文・社会科学編(南山大学), 査読無, 85
号, 2007, pp.107-123.

- ⑱ 小林勝 「経済発展著しいインドにて」『純
心博物館だより』, 査読無, 29号, 2007
年, pp.12-12.

[学会発表] (計4件)

- ① 杉本良男 「環流する文化とナショナリ
ズム」 人間文化研究機構プログラム
「現代インド地域研究」2009年全体集
会、2009年12月5日、京都大学(京
都府)
- ② 杉本良男 「インドの宗教ナショナリズ
ムと<ヒンドゥー>意識の転換」
「総合人間学の構築」研究会、2009年
7月25日、東京外国語大学アジア・アフリ
カ言語文化研究所(東京都)
- ③ サガヤラーヂ・A 「インドにおけるキリ
スト教とカースト問題—タミルナードウ
の事例」 日本南アジア学会第21回全国大
会、2008年9月28日、東洋大学(東京都)
- ④ Antonysamy Sagayaraj Natural
Disasters and Communication: Community
as Media, CMS Symbols - Symposia on
Communication for Social Development,
02-11-2007, University of Hyderabad,
India.

[図書] (計0件)

[その他]

- ホームページ

国立民族学博物館ホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/research/sr/19610013.html>

- 新聞掲載情報

- ① 「なぜいまガンディーカー学すべき点多い
「多元主義」」『産経新聞』夕刊(大阪)
2010/3/22
- ② 「フィールドワーク最前線①インドのキス
の危機」『京都新聞』2007/11/27
- ③ 「フィールドワーク最前線①インドのキ
ス」(共同通信系地方紙)『新潟日報』
2007/6/23, 『福井新聞』7/5, 『高知新聞』

7/6, 『神戸新聞』7/11, 『中国新聞』7/16,
『日本海新聞』7/20。

6. 研究組織

- (1) 研究代表者

杉本 良男 (SUGIMOTO YOSHIO)

国立民族学博物館・民族社会研究部・教授
研究者番号: 60148294

- (2) 研究分担者

なし

- (3) 連携研究者

小林 勝 (KOBAYASHI MASARU)

長崎純心大学・人文学部・教授

研究者番号: 20269096

アントニサーミ・サガヤラーヂ

(ANTONYSAMY SAGAYARAJ)

南山大学・人文学部・専任講師

研究者番号: 10434606